

# 新しい学生寮「共に住まい共に成長する」お茶大S.C.C

お茶の水女子大学理事・副学長 耳塚 寛明

お茶の水女子大学は国立女子大学としての使命を果たすべく、女性リーダーの育成とリーダーシップ教育を重視している。リーダーシップ教育の理念は、一人一人が知を備えて他者と関わり、異質な他者を理解することによって自らを磨き成長するところにある。

お茶の水女子大学はこの考え方を実践する空間として「二つのコモンズ」を設置した。第一に、二〇〇七年に附属図書館を改修して整備した「ラーニング・コモンズ」(前号参照)。第二に、本号で紹介する新たな学生寮としての「お茶大S.C.C」(Students Community Commons)である。

## 新タイプの学生寮

お茶の水女子大学にはすでに、主として大学院生を対象とした小石川寮と、留学生および学部学生を対象とした国際学生宿舎という、二つの学生寮があった。一昨年四月、羽入佐和子学長のもとで、新しい学生寮のコンセプトと設計案づくりがはじまった。学生寮は、

学生に安価で安全な住環境を提供することを目的とする。民間アパートの市場価格と寄宿料の差額分が経済的な学生支援に相当すると考えれば、学生支援上の経済効果は授業料減免に勝るとも劣らない。保護者の負担軽減にも大きく寄与する。

だが同時に、大学が希少な財源を投入して新寮を建設する以上、単なる経済的支援策にとどめるのはいささかもったいない。欧米のドミトリーの伝統やわが国の旧制高等学校の例が物語るように、学生寮は人間形成機能をも担うポテンシャルを持っている。いまどんな学生寮が必要なのか。

私たちの世代にとって国立大学の学生寮といえば相部屋しか想像できなかった。加えて、住環境としては劣悪なイメージがつきまわった。その後文部省が学生運動対策を加味して学生寮政策を「個室主義」へと転換したこともあり、現在ではバス・トイレを備えた個室学生寮が一般的である。

## 共に住まい共に成長する

新寮を設計するために、教員と事務職員混成のワーキング・グループを立ち上げ、そのコンセプトから議論することにした。一般的な趨勢に従えば、個人生活を満喫できる快適な個室中心の設計にすべきであつたらう。大学経営協議会の委員や学内教員からは、学生のニーズを調査し、それに沿った設計にすべきだという強い意見が出された。もっともである。だがニーズ調査をすれば個室に落ち着くことは目に見えている。それが今後数十年使用する学生寮としても優れたものなのか疑問が残った。第一、プライベートスペースの良質化を主眼とする学生寮を大学が作るのであれば、民間の学生会館なりアパートと提携し、あるいは業務委託したほうが、はるかに良質化と効率化が期待できるだろう。厳しい大学財政上の負担軽減にもつながる。ワーキング・グループでは、早々に個室主義を捨て「共に住まい共に成長する新しい学

生寮」を方針とすることにした。すでに完成していた図書館のラーニング・コモンズに次ぐ、第二のコモンズとして学生寮を位置づけた。いまの学生たちの多くは、かつてとは比較にならない「家族の庇護」のもとで成長している。入卒業式に出席する保護者の数は入学学生の倍を上回る。入学前のオープンキャンパスへの保護者の出席数もうなぎ登りで、子どもより積極的に質問する親が目立つ。加えて、高等学校をはじめ強力な「学校の庇護」のもとにも置かれている。学生たちを見ていると、大学の教員に対しても「きめ細かな」指導を期待していることがよくわかる。入学早々、時間割を組む相談に乗ってほしいと教授の研究室を訪れる学生も珍しくない。高校までの手取り足取り指導の効果である。もはや日本の青年期は、自律・自立を促す人間形成空間を欠いているのではないか。大人たちの庇護から解放された場、「他者との共生を強制する場」が必要ではないのか。

そのような共生の場として学生寮を建設することは、近年大学に求められている「就業力」育成の点でも有効に働くと考えられる。就業力とは就職後に役立つ実学的な専門知識・技能だけを意味するわけではない。異質な人々と協働・共生する中で公共的な課題を発見し、それを解決するために多様な知識やスキルを身につけ自在に発揮する力を意味するものと考えている。いかに学力が高くとも、それが現実的な他者との協働の中で発揮されなくては、持っていないも同然である。

## 5人で1つの「ハウス」に住む

そこで、学生寮を「5人で一つのコミュニティ」（「ハウス」と呼ぶ）から構成し、各ハウスに、共用のキッチン、トイレ(2)、バス、リビングを設置し、これら共用スペースの周囲に鍵のかかるプライベートスペースを配置することにした。個室には、ベッド、机、クローゼット、書棚、エアコンがあり、インターネットに接続できる。必要最低限の設備を備えてはいるが、個室から共有空間へと学生を「追い出す」設計が貫かれている。

これらは、新しい学生寮のコンセプトを物理的な空間として表現したものだが、あくま



お茶大SCC ハウス内のリビング(共用スペース)

暖やかな共生のためのハウス新  
ハウスを構成するABC

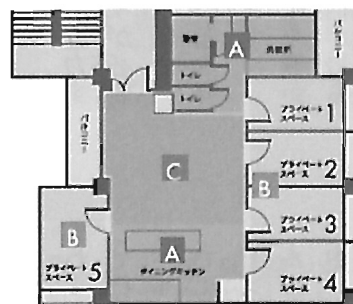
### Amenity Facilities

快適性を考慮した環境整備



### Bedroom Space

個室として静かに過ごす空間



### Communicate Living

ハウスメイトと交流する場



でも器、ハードウェアにすぎない。実際に他者との協働・共生を実現し、またコミュニティ生活に伴う問題を解決するためにはそれ相応の仕組みが伴わねばならない。そのため、学寮アドバイザーを置き、また学生同士の交流を促す各種行事、寮生による自主企画を支援する組織、広い視野からさまざまな学習を可能とする教育プログラムなどを提供することにした。

二〇一一年四月、新入生と二年生約五〇人を迎えて、新しいコンセプトを担うお茶大SCCが開寮した。私たちの試みが期待通り功を奏するかどうかはわからない。しかし、人間形成空間の変容に対して手をこまねいて

るのではなく、新しい仕組みを実験的に進めていくことは意味があるだろう。学生たちによって「共に住まい共に成長する」寮の伝統が根付いていくことを期待している。(SCCは、公益財団法人日本デザイン振興会主催「グッドデザイン賞2011」を受章しました。)